

佐賀県高等学校野球大会において私立学校の成績は公立校より優れているのか
：春季の九州地区高等学校野球佐賀大会の結果と先行研究の総括

山津 幸司（佐賀大学教育学部）

Are private schools performing better than public schools in the Saga prefecture
high school baseball tournament?

: Results of the spring Kyushu district high school baseball Saga tournament and a mini-review

Koji Yamatsu (Faculty of Education, Saga University)

(Received December 14th, 2023 ; accepted for publication March 11th, 2024)

要旨

高校野球において私立高等学校の躍進が目覚ましい。2023年8月に開催された全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園大会）に出場した49校の8割超（40校）が私立であり、3回戦以降に進んだ公立校は皆無であった。また、平成以降の春と夏の甲子園全国大会優勝校の9割超が私立であることなどから、高校野球における私立の優勢は明らかである。佐賀県においても夏の甲子園予選、春の甲子園予選（秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会）、NHK杯では最近15年程度の期間では私立が優勢となりつつある。一方、高校野球の代表的な公式戦のひとつである春季の九州地区高等学校野球佐賀大会（春季大会）においては私立学校が優勢かは不明である。そこで、本研究では次の二つの研究を実施した。すなわち、研究1の目的は春季大会における戦績は公立と私立のどちらが優勢かを明らかにすることであった。また、研究2では佐賀県の高校野球における私立と公立の成績を比較した研究報告を総括することであった。研究1の研究対象は、2006年から2023年までの春季の18大会に出場した44校（公立38校、私立6校）であった。 χ^2 検定の結果、私立の準優勝以上複数回進出率は50.0%で公立の13.2%に比べて有意に高かった。ロジスティック回帰分析の結果、私立の準優勝以上複数回進出となるオッズ比は6.60（95%信頼区間は1.03-42.2）であった。研究2では、本論文の研究1を含めた6研究が確認できた。秋季大会と春季大会では私立が公立より優勢を示す項目は各1つと少ないものの、NHK杯と比較的最近の夏の甲子園予選（2008～2022年）では私立優勢を示す項目が多く認められた。今後の課題として、夏の甲子園予選を除き分析対象大会を追加し可能な全公式戦を対象として分析を行う必要があると考えられた。以上のことから、佐賀県における春季大会でも私立優勢の可能性が一部示された。また、佐賀県の高校野球において私立の成績が優勢かどうかを明らかにするには、過去の全大会を分析対象として検証を行う必要がある。

Key words: 高校野球, 硬式野球, 運動部活動, ベースボール, 格差

I. 研究の背景と目的

高校スポーツにおける多くのメジャー種目では一般的に私立が運営する学校の部活動の成績が優勢である。特別に強化している一部の公立校も認められるが、全体からみると少数派である。私立優勢の傾向は高校野球でも例外ではない。近年開催された第105回（2023年）の全国高等学校野球選手権大会（以下、夏の甲子園大会）では、出場した49校のうち81.6%（40校）の出場校が私立であった。第105回大会に出場した公立9校のうち1回戦に勝利できたのは3校（鳥栖工業、徳島商業、市立和歌山）のみであり、2回戦で勝利した公立校は皆無であった。すなわち3回戦以降のベスト8進出は私立のみであり、夏の甲子園大会における実力面での私立の優勢は明らかである。さらに平成以降の甲子園優勝校は夏が33大会中90.9%（30校）、春の選抜高校野球大会（以下、春の甲子園大会）では34大会中94.1%（32校）が私立であった（阪神甲子園球場ホームページ、2023年11月30日現在）。以上のことから、高校野球における私立学校の優勢は一般的な傾向といえるだろう。

佐賀県における高校野球はどうだろうか。佐賀県の公立高等学校硬式野球部による夏の甲子園大会における顕著な実績としては、1994年の佐賀商業、2007年の佐賀北高校の全国優勝がある。夏の甲子園大会におけるこの公立二校の活躍の記憶が根強く残り、佐賀県の高校野球に関しては公立校が善戦しているとの印象がもたれている。実際に、夏の甲子園予選佐賀大会の全大会を分析した先行研究では私立が有意差をもって優勢とは言えない（優勝率は私立66.7%、公立33.3%、 $p=0.117$ ）ことが示されている（山津、2023b）。しかし、夏の甲子園予選佐賀大会の全45回大会を3期に分けると、最初と中間の15大会では私立と公立の優勝率に有意差は認められないが、直

近の15大会では私立の優勝率（私立66.7%，公立13.5%， $p=0.003$ ）は有意に高く、公立に対する私立の優勝可能性は12.8倍であった（山津，2023b）。以上のことから、夏の甲子園予選佐賀大会においても私立高等学校の優勢は近年顕著となりつつあることが伺える。

一方、高校野球では年間を通して公式戦が開催されている。秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会（以下、秋季大会）、NHK杯佐賀県高等学校野球大会（以下、NHK杯）などの公式戦における私立と公立の戦績に関してはすでに研究されているが、春季の九州地区高等学校野球佐賀大会（以下、春季大会）が分析されないまま残されていた。そこで、本研究の目的は、春季大会の成績は公立と私立のどちらが優勢なのかを明らかにすることであった（研究1）。また、佐賀県高校野球の公式戦における私立と公立の戦績差に関する比較結果を総括することであった（研究2）。

（研究1）春季の九州地区高等学校野球佐賀大会の戦績における私立と公立学校の比較

I. 研究の目的

本研究の目的は、春季大会の私立学校の戦績は公立校に比べて優れているのかを明らかにすることであった。

II. 研究方法

2-1. 研究対象

研究対象は、佐賀県高等学校野球連盟（<http://kouyaren-saga.jp/>）に2005年から2023年に加盟していた44校（公立38校、私立6校）であった。分析対象となった全44の高等学校の名称や運営主体の情報を巻末（付録1）に示した。分析対象大会は、春季大会における2005年から2023年までの

18大会とした。2020年の大会は新型コロナウイルス感染症蔓延のため中止となったため分析から除外した。分析対象大会をこの18大会とした理由は、春季大会の出場校や試合結果がインターネット上のホームページ（高校野球ドットコム、<https://www.hb-nippon.com/>）に完全にデータベース化されていたからである。

佐賀県の公立高等学校では数回の統合が実施された。そのため、2005年から2023年に大会出場した全高等学校を分析対象とし、統合前の大会結果は統合前の学校の成績として、統合後の結果は統合後の学校の成績として分析を行った。分析対象期間中の公立校の統合は5回であり、2007年に武雄青陵と武雄（統合後は武雄高校として存続）、2018年に白石と杵島商業（統合後は白石高校として存続）、嬉野と塩田工業（統合後は嬉野高校として存続）、鹿島と鹿島実業（統合後は鹿島高校として存続）の8校が4校となり、2019年には伊万里農林と伊万里商業（統合後は伊万里実業として存続）の2校が1校に統合された。また、2002年に唐津北と統合した東松浦が2005年に唐津青翔となった。分析対象期間中の秋季大会への出場参加チーム数は巻末（付録2）に示した通りであった。春季大会では様々な理由により複数の高等学校が合同チームで参加する場合がある。合同チームとして参加する理由は、部員が9人に満たない場合や学校統合により連名で参加する場合等である。分析対象期間中の合同チームでの参加回数は計6回13校であった。具体的には、2015年の嬉野と太良、2018年の嬉野と唐津青翔、2019年の嬉野と塩田工業、2021年の神崎と佐賀東、2022年の高志館と唐津南と巖木、2023年の高志館と唐津南、であった。合同チームが優勝や準優勝となった実績はなかった。

2-2. 分析方法

分析に用いたのはカテゴリー化された変数であった。すなわち、「優勝」は各大会の決勝戦で勝利した学校、「準優勝」は決勝戦で負けた学校、「ベスト4」は準決勝戦で負けた2校、「ベスト8」は準々決勝戦で負けた4校として集計を行った。また、「準優勝以上」は決勝戦に進出した2校、「ベスト4以上」は準決勝戦に進出した4校、「ベスト8以上」は準々決勝戦に進出した8校、と定義した。また、上記の大会上位進出を分析対象期間中に2回以上、すなわち「複数回進出」したかどうかも分析の観点とした。用いた統計解析は χ^2 検定とロジスティック回帰分析であり、有意水準は5%未満、有意傾向は10%未満とした。

III. 結果

3-1. 春季の九州地区高等学校野球佐賀大会の成績のクロス集計の結果(表1)

分析対象となった18大会の試合成績の集計と χ^2 検定の結果は次の通りであった。

優勝校は公立が8校、私立が2校であった。優勝回数は最多が佐賀商業(公立)と佐賀北(公立)の各4回、続いて東明館(私立)の3回、鳥栖(公立)の2回、佐賀工業(公立)、嬉野(公立)、鳥栖商業(公立)、佐賀西(公立)、塩田工業(公立)、龍谷(私立)が各1回であった。優勝成績の割合(優勝率)を χ^2 検定にて分析した結果、優勝率は私立の33.3%と公立の21.1%で有意差は認められなかった($p=0.505$)。

準優勝校は公立が9校、私立が2校であった。準優勝回数は最多が唐津商業(公立)、龍谷(私立)の各3回、佐賀商業(公立)、鳥栖(公立)、佐賀学園(私立)の各2回、佐賀北(公立)、

有田工業（公立）、佐賀工業（公立）、多久（公立）、神埼（公立）、鹿島実業（公立）が各1回であった。準優勝成績の割合（準優勝率）を分析した結果、準優勝率は私立の33.3%、公立が23.7%であり、これらに有意差は認められなかった（ $p=0.612$ ）。

ベスト4以降の分析も同様に行ったが、ベスト4進出の割合（ベスト4進出率）を分析した結果、私立のベスト4進出率が33.3%、公立が39.5%で有意差は認められなかった（ $p=0.774$ ）。また、ベスト8進出の割合（ベスト8進出率）を分析した結果、ベスト8進出率は私立の66.7%と公立の73.7%に有意差が認められなかった（ $p=0.720$ ）。

表1の二段目以降に、分析対象の大会で準優勝以上に進出した割合（準優勝以上進出率）、ベスト4以上に進出した割合（ベスト4以上進出率）、ベスト8以上に進出した割合（ベスト8以上進出率）、同一校が2大会以上優勝した割合（優勝複数回進出率）、同一校が2大会以上準優勝した割合（準優勝複数回進出率）、ベスト4に2大会以上進出した割合（ベスト4複数回進出率）、ベスト8に2大会以上進出した割合（ベスト8複数回進出率）、準優勝以上の成績を2大会以上獲得した割合（準優勝以上複数回進出率）、ベスト4以上の進出を2大会以上獲得した割合（ベスト4以上複数回進出率）、ベスト8以上の進出を2大会以上獲得した割合（ベスト8以上複数回進出率）を分析した結果を示している。その結果、私立の準優勝複数回進出率（私立50.0%、公立13.2%）に有意差を認め（ $p=0.030$ ）、私立の方が公立校より高く優れていた。準優勝以上進出率（私立33.3%、公立7.9%）に有意傾向が認められた（ $p=0.068$ ）。

3-2. ロジスティック回帰分析の結果(表2)

ロジスティック回帰分析の結果、準優勝以上への複数回進出で有意な関連性が認められた ($p=0.046$)。すなわち、私立の準優勝以上への進出のオッズ比は6.60 (95%信頼区間は1.03-42.2) であった。以上の結果は私立が準優勝以上となる可能性が公立と比べて6.6倍高いことを意味している。また、準優勝複数回進出で有意傾向が認められ、私立の準優勝への複数回進出可能性が公立に比べて高い傾向が示された ($p=0.094$)。

IV. 考察

本研究では、春季大会の成績が公立と私立で異なるのかを検証した。その結果、表1に示したように、私立の準優勝以上複数回進出率のみで有意に高く、春季大会においても私立優勢の可能性が一部示された。表2に示したロジスティック回帰分析の結果からは、私立の準優勝以上に複数回進出の可能性は公立に対し6.6倍高いことが明らかとなった。以上の結果をまとめると、春季大会で私立が準優勝以上に複数回進出する可能性は公立より高く、私立優勢の一面が明らかとなった。一方、先行研究で示されてきた私立の優勝可能性の優位性は本研究では認められなかった。先行研究において夏や春の甲子園予選佐賀大会 (山津, 2023a; 山津, 2023b) やNHK杯 (山津, 2024) における私立優勝のオッズ比は有意または有意傾向であるのとは対照的であった。佐賀県高等学校野球大会における春季大会の優勝確率が私立と公立で違いが認められなかったのかその理由は定かではない。春季大会は甲子園全国大会への出場に直接つながる大会ではないためとの解釈も可能である。春季大会では1) 夏の甲子園予選に比べて大会に対するモチベーションが高くなりえないことや、2) 夏の甲子園予選に向けて選手起用や戦術に対して色々試しておきたいとのチームの戦術

や目標設定の違いなどが理由として考えられる。

最後に、高校野球の成績に影響すると考えられる次のような交絡因子を分析に用いていく必要がある。まず、私立学校の特待制度や佐賀県の公立校における野球の推薦入試（佐賀県教育委員会，2021）の影響を考慮していく必要がある。次に、高校野球において監督やコーチなどの指導者の影響を検討できる分析の方法論を見つけていく必要がある。例えば、指導者の歴任回数は高校野球の公式戦成績に大きく影響する可能性があるため利用されるべきデータの一つといえるだろう。

（研究2）佐賀県の高校野球において私立学校と公立校の成績に関する研究の総説

I. 研究2の目的

本研究2の目的は、佐賀県の高校野球における公式戦成績には私立と公立で差が認められるかを明らかにするための先行研究を総括することであった。

II. 研究方法

論文の検索方法は、2023年11月16日に検索エンジンCiNii Articleを用いて「佐賀県」「高校野球」のキーワードを用いて検索を行った。

III. 結果と考察

2023年11月16日に検索エンジンCiNii Articleを用いて「佐賀県」「高校野球」のキーワードを用いて論文検索を行った結果、3編（山津，2022；山津，2023a；山津，2023b）が検出された。ま

た、3編の引用文献から見つけ出されたその当時印刷中であった1編（山津，2024）を加え、さらに本論文の研究1の結果を追加した計5編の論文を分析対象とした。分析対象となった5論文のうち、2編は夏の甲子園予選佐賀大会（山津，2022；山津，2023a）を対象とし、1編は秋季大会（山津，2023b）、1編はNHK杯（山津，2024）、最後の1編は春季大会（山津，本論文の研究1）であった。

表3に佐賀県高校野球公式戦における公立と私立の戦績に関する先行研究の結果を一覧にまとめた。秋季大会では「準優勝以上」、春季大会では「準優勝以上複数回進出」、NHK杯では「準優勝」「準優勝以上」「優勝複数回」「ベスト4複数回進出」「ベスト4以上複数回進出」、夏の甲子園予選（2008～2022年）では「優勝」「準優勝以上」「ベスト4複数回進出」、夏の甲子園予選（2012～2021年）では「ベスト4進出」「準優勝以上」において私立の戦績優勢が認められた。以上をまとめると、1）2007年以前の夏の甲子園予選では私立の優勢は全く認められない、2）2008年以降の夏の甲子園予選やNHK杯では私立優勢を示す結果が多数認められること、3）秋季大会と春季大会の私立優勢を示す結果は一部にとどまる、との結果が認められた。

図1に、佐賀県高校野球公式戦における私立の優勝確率のオッズ比をまとめた。図1からわかることは、1）分析対象大会数が多い、すなわち分析対象期間が長い場合には私立の戦績優勢は認められないこと、2）分析対象大会の時期が古い場合ほど私立の戦績優勢は認められないこと、3）秋季大会、春季大会、およびNHK杯では少なくとも2005年以前の大会結果が反映されていないため慎重な解釈を要する、ことが伺える。以上のことより、夏の甲子園予選以外の大会において過去の全公式戦を対象として分析を行う必要があると考えられた。

また、表3と図1から読み取れる課題として、分析対象となった公式戦の大会数には一貫性のなさが認められた。すなわち、研究対象となった公式戦の最多は1978年から2022年までの45大会を研究対象とした夏の甲子園佐賀県予選での成績であった（山津，2023a）。一方、同じ夏の甲子園佐賀県予選を対象とした別の研究は2012年から2021年の10大会、秋季大会を対象とした15大会、春季大会を対象とした18大会、NHK杯を対象とした11大会であった。分析対象大会数が少ないほど私立優勢の結果が認められる可能性も想定されるため、繰り返しになるが過去の全公式戦を分析対象として分析を行う必要が高いと考えられた。

IV. 総合考察

佐賀県高校野球の公式戦において、私立学校の成績が優勢なのかを明らかにするために、5編の先行研究を総括的に検討した。その結果、次のような結果が明らかとなった。

表3に過去の公式戦の結果を一覧にしたところ、1) 秋季大会や春季大会は私立が優先を示す項目は各1つと少なく、2) NHK杯は私立優勢を示す項目は5つと多く、3) 夏の甲子園予選については全大会分析では私立優勢とは言えないが、2008年以降の大会では優勝可能性を含めた3項目で私立優勢を示している、ことが伺えた。以上の結果をまとめると、私立優勢とは言えない条件として、1) 分析対象大会が多く、分析対象期間が長いこと、2) 分析対象時期が古いこと、があげられる。また、各大会の特徴が結果に影響している可能性も否定できない。例えば、優勝が甲子園全国大会に直接つながる大会と上位進出が甲子園大会予選のシードの条件である場合、春季大会のように九州ブロック大会のみへの出場の場合には各大会に対するチームの戦術や選手の目標設定に

も影響することが予想される。各大会の特徴を踏まえた分析手法の採用や結果の解釈が今後求められる。今後の喫緊の研究課題としては、夏の甲子園予選以外の三つの公式戦（秋季大会、春季大会、NHK杯）において2007年以前でさかのぼれるすべての試合を分析対象として検証を行うことである。

表3からは、私立の優勝や準優勝となる可能性の高さも垣間見える。すなわち、2007年以降の四つの公式戦において、夏の甲子園予選における私立の優勝オッズ比は有意であり、秋季大会、春季大会、NHK杯における私立の優勝オッズ比も有意傾向である。準優勝以上に限定すると、2007年以降の四つの公式戦のすべてで私立の準優勝以上オッズ比は6.86～18.1と有意に高いことで共通している。佐賀県内に硬式野球部がある私立学校は6校のみと少数であるにもかかわらず、準優勝以上となる可能性が6倍以上高いことは驚くべき結果といえよう。一方で、2010年開校の早稲田佐賀、1987年開校の東明館は2校とも私立で夏の甲子園全国大会にも出場経験のある強豪校である。すなわち、この2校の開校前では私立は4校のみとさらに少ないため、繰り返しになるが2007年以前の公式戦の結果をすべて分析対象として検証を行う必要がある。

図1には私立の優勝オッズ比の結果を示した。図1からわかることは、1) 分析対象大会数が多いほど私立の優勝オッズ比は有意とならない、2) 分析対象大会に古い大会が含まれるほど私立の優勝オッズ比は有意とはならない、場合が多いことである。夏の甲子園予選佐賀大会において私立優勢は少なくとも2008年以降であり、秋季大会、春季大会、NHK杯においても夏の甲子園予選佐賀大会と同じような傾向が認められるかを急ぎ検証すべきである。

V. 結論

本研究では、春季の九州地区高等学校野球佐賀大会の成績が公立と私立で異なるのかを検証した。その結果、私立の準優勝以上複数回進出可能性は有意に高いことが示されたことから、佐賀県高校野球における春季大会においても私立優勢の可能性が一部示された。また、研究2の結果から、佐賀県高校野球の戦績における私立優勢の検証は、秋季大会の2006年以前、春季大会の2004年以前、NHK杯の2011年以前の公式戦の結果を分析対象に加えて明らかにしていく必要があると考えられた。

VI. 引用文献

- 阪神甲子園球場, 高校野球情報, <https://www.hanshin.co.jp/koshien/highschool/> (2023年11月30時点でアクセス可能)
- 佐賀県高等学校野球連盟, <http://kouyaren-saga.jp/> (2023年11月30日時点でアクセス可能)
- 高校野球ドットコム, <https://www.hb-nippon.com/> (2023年11月30日時点でアクセス可能)
- 佐賀県教育委員会, 2021, 令和4年度佐賀県立高等学校入学者選抜実施要項
- 佐賀県教育委員会, 2021, 令和4年度佐賀県立高等学校入学者選抜 特別選抜の指定校について。
- 山津幸司, 2022, 高等学校の運営主体が全国高等学校野球選手権大会の予選成績に及ぼす影響: 佐賀県における私立の高等学校は公立校より夏の甲子園大会に出場しやすいのか?, 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 9巻1号, 1-13
- 山津幸司, 2023a, 全国高等学校野球選手権大会の佐賀県予選成績に及ぼす影響: 私立の高等学校の予選成績は公立校より優れているのか?, 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 9巻2号, 1-18
- 山津幸司, 2023b, 秋季の九州地区高等学校野球佐賀大会の私立の成績は公立より優れているのか?, 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 10巻1号, 1-15
- 山津幸司, 2024, NHK杯佐賀県高等学校野球大会の私立の成績は公立校より優れている, 佐賀大学教育学部研究論文集, 8巻1号

表1. 春季の九州地区高等学校野球佐賀大会の公立と私立の成績の比較

	公立校 (38校)	私立校 (6校)	χ^2 検定
優勝率 (%)	21.1	33.3	0.5047
準優勝率 (%)	23.7	33.3	0.6120
ベスト4進出率 (%)	39.5	33.3	0.7741
ベスト8進出率 (%)	73.7	66.7	0.7198
準優勝以上進出率 (%)	47.4	50.0	0.4550
ベスト4以上進出率 (%)	50.0	66.7	0.4475
ベスト8以上進出率 (%)	81.6	66.7	0.4000
優勝複数回進出率 (%)	7.9	16.7	0.4873
準優勝複数回進出率 (%)	7.9	33.3	0.0681 #
ベスト4複数回進出率 (%)	18.4	33.3	0.4000
ベスト8複数回進出率 (%)	47.4	50.0	0.9045
準優勝以上複数回進出率 (%)	13.2	50.0	0.0297 *
ベスト4以上複数回進出率 (%)	34.2	66.7	0.1292
ベスト8以上複数回進出率 (%)	63.2	66.7	0.8681

*; P<0.05 #; P<0.10

表2. 春季の九州地区高等学校野球佐賀大会の公立と私立の成績に関する分析結果

	オッズ比 [§]	95%信頼区間	P値
優勝	1.88	0.290-12.1	0.5095
準優勝	1.61	0.252-10.3	0.6143
ベスト4進出	0.77	0.125-4.72	0.7745
ベスト8進出	0.71	0.113-4.52	0.7207
準優勝以上	1.92	0.339-10.9	0.4601
ベスト4以上進出	2.00	0.326-12.3	0.4536
ベスト8以上進出	0.45	0.069-2.97	0.4085
優勝複数回進出	2.33	0.201-27.0	0.4978
準優勝複数回進出	5.83	0.739-46.1	0.0944 #
ベスト4複数回進出	2.21	0.336-14.6	0.4085
ベスト8複数回進出	1.11	0.198-6.22	0.9046
準優勝以上複数回進出	6.60	1.031-42.2	0.0463 *
ベスト4以上複数回進出	3.85	0.620-23.9	0.1480
ベスト8以上複数回進出	1.17	0.189-7.21	0.8682

§; 公立高等学校を参照とした場合のオッズ比 *; P<0.05 #; P<0.10

表3. 佐賀県高校野球公式戦における公立と私立の成績に関する分析結果

	秋 (2007-2022)	春 (2005-2023)	NHK杯 (2012-2023)	夏 (1978-2022)	夏 (1993-2007)	夏 (2008-2022)	夏 (2012-2021)
優勝	OR=6.40 #	-	OR=6.20 #	-	-	OR=12.8 *	OR=6.75 #
準優勝	-	-	OR=12.4 *	-	-	-	-
ベスト4進出	-	-	-	-	-	OR=9.23 #	OR=12.2 *
ベスト8進出	-	-	-	-	-	-	-
準優勝以上	OR=11.8 *	-	OR=7.00 *	-	-	OR=18.1 *	OR=6.86 *
ベスト4以上進出	-	-	-	-	-	OR=8.21 #	OR=9.09 #
ベスト8以上進出	-	-	-	-	-	-	-
優勝複数回進出	-	-	OR=17.5 *	-	-	-	-
準優勝複数回進出	OR=8.75 #	OR=5.83 #	-	-	-	-	-
ベスト4複数回進出	-	-	OR=17.5 *	-	-	OR=11.3 *	-
ベスト8複数回進出	-	-	-	-	-	-	-
準優勝以上複数回進出	-	OR=6.60 *	-	-	-	-	-
ベスト4以上複数回進出	-	-	OR=8.00 *	-	-	OR=5.17 #	-
ベスト8以上複数回進出	-	-	-	-	-	-	-

表中の数値は公立高等学校を参照とした場合のオッズ比 *; P<0.05 #; P<0.10

ロジスティック回帰分析を行い有意な(有意傾向も含む)オッズ比が認められた項目にオッズ比を記載した。オッズ比が1より大きい場合は私立の該当成績の発生可能性が高いことを意味する。

夏 (山津, 2023)	4.00, 0.85-24.8, $P=0.136$					
	1978年			2022年		
夏 (山津, 2023)	3.05, 0.43-21.8, $P=0.267$		3.05, 0.43-21.8, $P=0.267$		12.8, 1.84-89.2, $P=0.01^*$	
	1978年	1992年	1993年	2007年	2008年	2022年
夏 (山津, 2022)	6.75, 0.995-45.8, $P=0.0505$					
	2012年			2021年		
秋 (山津, 2023)	6.40, 0.999-41.0, $P=0.0501$					
	2007年			2022年		
春 (山津, 本論文)	1.88, 0.29-12.1, $P=0.5095$					
	2005年			2023年		
NHK杯 (山津, 2024)	6.20, 0.97-39.8, $P=0.0543$					
	2012年			2023年		

図1. 佐賀県高校野球公式戦における私立学校の優勝状況

実線は分析対象大会の期間、線上の数値はオッズ比、95%信頼区間、および有意確率を示している

付録1

No. 高校名	運営主体
1 伊万里	公立
2 有田工	公立
3 伊万里実（2019年に伊万里農林、伊万里商業と統合）	公立
4 唐津商	公立
5 唐津西	公立
6 唐津工	公立
7 小城	公立
8 多久	公立
9 巖木	公立
10 唐津南	公立
11 唐津東	公立
12 唐津青翔	公立
13 白石（2018年に杵島商業と統合）	公立
14 嬉野（2018年に塩田工業と統合）	公立
15 武雄（2007年に武雄青陵と統合）	公立
16 鹿島（2018年に鹿島実業と統合）	公立
17 太良	公立
18 佐賀農	公立
19 佐賀北	公立
20 佐賀商業	公立
21 佐賀工	公立
22 致遠館	公立
23 高志館	公立
24 佐賀西	公立
25 佐賀東	公立
26 神埼清明	公立
27 三養基	公立
28 鳥栖工	公立
29 鳥栖商	公立
30 神埼	公立
31 鳥栖	公立
32 敬徳	私立
33 龍谷	私立
34 佐賀学園	私立
35 北稜	私立
36 早稲田佐賀	私立
37 東明館	私立
(分析対象としたが分析対象期間中に統合となった学校)	
38 武雄青陵（2007年に武雄と統合、武雄高校として存続）	公立
39 杵島商業（2018年に白石と統合、白石高校として存続）	公立
40 塩田工業（2018年に嬉野と統合、嬉野高校として存続）	公立
41 鹿島実業（2018年に鹿島と統合、鹿島高校として存続）	公立
42 伊万里商業（2019年に伊万里農林と統合、伊万里実業として存続）	公立
43 伊万里商業（2019年に伊万里農林と統合、伊万里実業として存続）	公立
44 東松浦（2002年唐津北と統廃合、2005年唐津青翔設置）	公立

付録2. 春季の九州地区高等学校野球佐賀大会の出場学校数

	全体	公立校	私立校
2005年	41	36	5
2006年	38	33	5
2007年	39	34	5
2008年	40	35	5
2009年	40	35	5
2010年	40	35	5
2011年	40	34	6
2012年	40	34	6
2013年	41	35	6
2014年	41	35	6
2015年	40	34	6
2016年	40	34	6
2017年	41	35	6
2018年	39	33	6
2019年	38	32	6
2020年	新型コロナウイルス感染症蔓延のため中止		
2021年	35	29	6
2022年	34	28	6
2023年	35	29	6

\$ 複数校による合併チームは1校として数えた